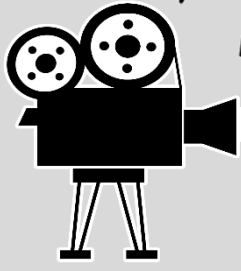


アルカス 名画座



令和6年度優秀映画鑑賞推進事業

2025
1/13
(月・祝)

豚と軍艦
10:30
(108分)

情炎
13:00
(97分)

少年
15:20
(97分)

心中天網島
17:45
(103分)

完全入替制
全席自由

入場料(前売・当日) 1本500円 / 2本800円 / 3本1200円 / 4本1600円

さくら倶楽ご招待対象公演 / 障がい者割引20%OFF(チケット購入時手帳提示)

11/10(日)よりアルカスホールにてチケット発売開始 窓口9:00～ 電話予約13:00～(3日前までに清算)

今村昌平監督作品
「豚と軍艦」1961

大島渚監督作品
「少年」1969

60年代日本映画を支えた
名監督の代表作を一挙上映!!

吉田喜重監督作品
「情炎」1967

篠田正浩監督作品
「心中天網島」1969

寝屋川市立地域交流センターアルカスホール TEL:072-821-1240

受付時間／9:00～21:00 〒572-0837 大阪府寝屋川市早子町12-21

FAX:072-821-1241 E-mail: arukas-info@astem-co.co.jp 京阪電車 寝屋川市駅より徒歩約3分

主催:指定管理者 株式会社アステム、国立映画アーカイブ

特別協力:文化庁、一般社団法人日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、株式会社KADOKAWA



豚と軍艦 (白黒／シネマスコープ／モノラル／108分)

[1961年 日活]

[スタッフ]		会計係 星野 大坂志郎
脚本	山内 久	春子の姉 弘美 中原早苗
監督	今村 昌平	軍治 小沢昭一
撮影	姫田真佐久	親分 日森 三島雅夫
照明	岩木 保夫	貫市 東野英治郎
録音	橋本 文雄	崎山 山内明
音楽	黛 敏郎	矢島 西村晃
美術	中村 公彦	陳 殿山泰司
[出演者]		大八 加藤武
欣太	長門裕之	鉄次 丹波哲郎
春子	吉村実子	春子の母ふみ 菅井さん
勝代	南田洋子	

横須賀の「どぶ板通り」を舞台に、アメリカ軍基地の残飯を使った養豚で一儲けを狙う落ち着きのないチンピラの欣太(長門)と、彼を慕う春子(吉村)の無軌道ではない恋の行方を描き、安保体制下にある敗戦国日本の姿をえぐり出した風刺劇。本作でデビューした吉村実子が力強いヒロインを好演。また、終盤の豚の群れが暴走するシーンなどの独創的な演出や、撮影所内に見事に再現された「どぶ板通り」のセットもみどころ。『「エロ事師たち」より人類学入門』(1966)などでも知られる今村昌平の作風は、しばしば「重喜劇」とも称され、人間の泥臭いエネルギーを発散する映画が多いが、その本格的な始まりとなった一本である。



情炎 (白黒／シネマスコープ／モノラル／97分)

[1967年 現代映画社]

[スタッフ]		[出演者]	
原作	立原正秋	織子	岡田茉莉子
脚本・監督	吉田喜重	能登光晴	木村功
撮影	金宇満司	労務者	高橋悦史
照明	海野義雄	悠子	しめぎしがこ
音楽	加藤一郎	古畑隆志	菅野忠彦
音楽	池野成	繁子	南美江
美術	梅田千代夫		

松竹を離れた吉田喜重と岡田茉莉子が設立した現代映画社製作による『女のみづうみ』(1966、川端康成原作)に次ぐ、第2作。原作は立原正秋による同名小説で、以降、吉田作品は『炎と女』(1967)から『戒厳令』(1973)までオリジナル脚本が続く。撮影は岩波映画出身の金宇満司で、本作の後には『黒部の太陽』(1968、熊井啓監督)など主に石原プロ作品の劇場映画撮影に携わった。社長夫人として愛のない結婚生活を送っている女性が、母の情人だった男と再会し、自らもその男を愛し母と同じ道をたどりはじめるという物語を、吉田は性を主題に、『水で書かれた物語』(1965)『女のみづうみ』に続けて、女性側から追究した。岡田は本作について自伝に次のように記している。「吉田の映像表現が、よりいっそう自由に、そして大胆に追及されており、それが私自身にも演技することの不思議な魅力、その奥深さといったものを改めて感じさせる、思い出深い作品」。

少年 (カラー／シネマスコープ／モノラル／97分)

[1969年 創造社＝ATG]

[スタッフ]		[出演者]	
脚本	田村孟	少年	阿部哲夫
監督	大島渚	父	渡辺文雄
撮影	吉岡康弘	母	小山明子
〃	仙元誠三	チビ	木下剛志
録音	西崎英雄		
音楽	林光		
美術	戸田重昌		

日本中を放浪して車にわざとぶつかり、言いがかりをつけてお金を請求する「当たり屋」の少年とその家族の物語。傷痍軍人の父は、戦後の日本社会で自分の居場所を見つけられず、家族を連れて全国を放浪している。少年の母親は少年と血がつながっていない。少年は、父と母から酷使されても、この家族という共同体から逃げ出さず、この共同体が崩れないように、自分の体を傷つけながら「当たり屋」を続けることを選択する。松竹ヌーベルバーグのひとりとして1950年代末から野心作を立て続けに監督してきた大島渚は、映画という表現形式を通じて日本における国家や国民の枠組みそのものを批判的に追求してきた映画監督であるが、本作は大島の思想が見事に映像化された代表作のひとつ。ヴェネチア国際映画祭に出品されて高い評価を得た。「キネマ旬報」ベストテン第3位。

心中天網島 (白黒／スタンダード／モノラル／103分)

[1969年 表現社＝ATG]

[スタッフ]		[出演者]	
原作	近松門左衛門	紙屋治兵衛	中村吉右衛門
脚色	富岡多恵子	治兵衛の妻おさん／遊女小春	
脚色・監督	篠田正浩	岩下志麻	
撮影	成島東一郎	孫右衛門	滝田裕介
照明	奥山保雄	太兵衛	小松方正
録音	西崎英雄	おさんの父五左衛門	加藤嘉
脚色・音楽	武満徹	伝兵衛	藤原釜足
美術	栗津潔	黒子の頭	浜村純
		叔母	河原崎しづ江
		お杉	左時枝
		女将	日高澄子

近松門左衛門の有名な人形浄瑠璃を映画化した、松竹出身の篠田正浩監督の代表作。篠田監督は学生時代より日本の古典芸能の研究を志していたが、この作品では、浄瑠璃の伝統性と20世紀芸術である映画との創造的な葛藤が結実している。その「新しい解釈」を示しているのが、例えば黒子の出現であり、監督夫人でもある岩下志麻の二役(遊女の小春、妻のおさん)であろう。中村吉右衛門演じる治兵衛が妻を捨てて遊女との情死行に至るまで、愛の情念が狂おしく燃える様を描くこの物語を脚本化するにあたり、監督は詩人・作家の富岡多恵子と作曲家武満徹の協力を仰いでいる。成島東一郎による撮影が、映画の空間に立体性を与えているのも見逃せない。



アート・シアター・ギルド(ATG)との提携による低予算映画であったが、「キネマ旬報」ベストテンの第1位、監督賞、さらに女優賞も受賞している。

寝屋川市立地域交流センター アルカスホール

〒572-0837大阪府寝屋川市早子町12-21
TEL072-821-1240/FAX072-821-1241
メールarukas-info@astem-co.co.jp

●京阪本線「寝屋川市」駅 東口から徒歩約3分

AruKas
アルカスホール

